

⑬ 尊経閣文庫蔵本・専修大学附属図書館蔵本・天理大学附属天理図書館蔵本・墨流本・陽明文庫蔵本、「理」。国立国会図書館蔵本、「宿」に傍書「理」。

⑭ 天理大学附属天理図書館蔵本、「嘉」に傍書「佳」。

(39) 第三章(第一節・第二節・第三節・第六節)所収

(40) 31・41・89・108・109・119・122・138・200・232・300・363・371・397・431・433・457・479・494・539・628・648・661など。

(41) 山城切、41・89・108・109・119・200・232・300・397・433・457など。多賀切、89・108・457・494・539・628など。

(42) 山城切には裁断に因る不明箇所がある。当該箇所については□で示す。以下、同。

(43) 三木雅博氏著『和漢朗詠集とその享受』〔平成7年 勉誠社〕P.144・145

(44) 前掲(注6)に同。

(45) 本書(第三章第四節)中、指摘した。

〈付記〉

資料の調査にあたって、笠嶋忠幸氏(出光美術館)、長華子氏(尊経閣文庫)にそれぞれ高配賜りました。厚く御礼申し上げます。

第八節 伝藤原行成筆大字切の位置

一

伝藤原行成筆大字切（略称…伝行成筆大字切、略号…行大）は書されている各文字の大きさが他本に比して大きいことからそのように呼称されている。『古筆学大成』第一三巻に一三葉の断簡が収められているが、その現存状況から、書された当時は恐らく巻上下ともに揃っていたものと思われる。^①

かつて、堀部正二氏は「その筆蹟は高野切第一種と同筆と思しきもので、恐らくは行成の流風を汲む者の筆、後一條・後朱雀帝の頃のものであらう」とされた。「朗詠集を書写したものであるの中ではその最も古きものの一つと考へられる点、頗る貴重すべきものがある」とされ、さらに、本文は「粘葉装本や関戸家本などの系統とは又別種のものやうである」と述べられた。^②

小松茂美氏は伝行成筆大字切について、その書写年代を「天喜元年（一〇五三）前後」とされたものの、同氏の本文に関する御論は見当たらない。^③

一方、久曾神昇氏は、平安時代書写とされる諸伝本を「初稿本」・「再稿本」・「精撰本」に分類され、伝行成筆大字切は久松切とともに「再稿本であったと推定できよう」とされた。同氏は卷子本・草手本についても「再稿本」とされた。^④

伝行成筆大字切は現存する分量が僅かである。調査の範囲が限られ、そこで得た考察結果をもとに結論づけることは困難である。しかし、前述した通り書写年代が古く、名筆であることから研究上、欠かせない資料である。

二

伝行成筆大字切の現存状況について『古筆学大成』第一三巻に収められている断簡（一三葉、計四九首）の詩歌句を『新編

国歌大観』の番号で示すと次の通りとなる。

- ① 304・305・306 ② 317く321 ③ 322く326 ④ 334く337 ⑤ 382く387 ⑥ 389く391 ⑦ 396
 ⑧ 458く460 ⑨ 475く478 ⑩ 480 ⑪ 481・482・483
 ⑫ 578く585 ⑬ 608・609・610

諸伝本間に見られる排列について異同調査を行ったところ、右のうちの⑪では卷子本に、また、⑬では久松切にそれぞれ独自の揺れが確認されたが、伝行成筆大字切の排列はいずれもその他の伝本と同一であった。しかし、詩歌句の有無については以下の通り異同がある。

右の①く⑬のうち、他本に有り、伝行成筆大字切に無い詩歌句は見当たらない。その一方、他本には無い詩歌句を伝行成筆大字切が有している箇所がある。それは321・322であり、右のうちの②・③に含まれている。

既に、本書(第二章第五節)中、述べた通り、粘葉本・伊予切には321が有り、322が無い。また、雲紙本・関戸本には321が無い、322が有る。

粘葉本類に322が無いことについて、久曾神昇氏は「原本には存しながら、粘葉本、伊予切の祖本において、すでに脱していたと、しばらく推定しておく」と述べられた。⁵⁾ 著者も「322が原本に存していた」可能性があると考える。その事由については、既に本書(第二章第五節)中、指摘した通りであるが、次に挙げる当該二首(321・322)に存する伝行成筆大字切の注記の内容からもそれは首肯される。

まず、伝行成筆大字切の注記を挙げ、次に異同を載せ、当該注記を有する諸伝本の略号を括弧内に示す。

◆321田(行大・唐2)

菅(粘・伊)

田達音(久・戊)

白 或本田(山)

秋暮傍山行 田達音(多)

ナシ(葦)

◆322天淨識寶鴻 菅(行)大・久・山・多⁶

菅(雲)⁷・関・戊・葦

右に挙げた321について、伝行成筆大字切では(唐紙切2にも)「田」とある。その他、久松切・戊辰切では「田達音」と注されており、山城切では「或本田」と注されているようである。いずれも島田忠臣を指す。粘葉本・伊予切では、「菅」とするが、本作品は『田氏家集』に所収されている。

また、322の伝行成筆大字切では(久松切・山城切・多賀切にも)「天淨識寶鴻 菅」と注され、出典『菅家文章』巻五の記載(重陽節侍宴同賦 天淨識寶鴻応製)と一部、一致している。

以上、伝行成筆大字切は排列においては他本と一致していた。次に、諸伝本と伝行成筆大字切との間に見られる詩歌句の有無について異同を調査したところ、伝行成筆大字切に脱漏は見られなかった。伝行成筆大字切は321・322を有しており、かつ、その注記が他文献のものと一致する内容であることが確認された。

前述した通り、伝行成筆大字切の書写年代は古く、雲紙本・粘葉本等と同じ頃の書写(十一世紀中葉)と推定されている。それを前提とすると、伝行成筆大字切が当該二首(321・322)を有し、しかも、そこに書かれている注記の内容が他文献のものと一致するという事実から、当該二首(321・322)が公任原撰本に併存していた可能性があると考えられる。

なお、現存する十二世紀書写と推定されている諸伝本(断簡等も含む)のうち、現存範囲内のものについてはいずれの伝本も当該二首(321・322)を有する(久松切・卷子本・山城切・多賀切・戊辰切・葦手本ではいずれも321・322を有する)。それに加え、久松切・山城切・多賀切・戊辰切の注記内容が伝行成筆大字切と共通していることは注目される。

次に、個々の本文を考察した結果について述べる。和歌は一句、漢詩は一文字を単位として異同調査を全本文に亘って行った。その際、異体字・略字等について、また、和歌では漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について異同とは見做さないこととした。また、後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、対象外とした。

その結果が次の【諸伝本間の本文異同調査表】であり、斜線の左は和歌、右は漢詩を示し、上と右に記した略号の結ばれた欄をそれぞれ三段に分け、上段にはその二本間における対照箇所数を、中段には同文箇所数を、下段にはその対照箇所数に対する同文箇所数の割合を%で表した。

【諸伝本間の本文異同調査表】に拠ると、考察範囲が限られており、対照箇所数は少ないものの、伝行成筆大字切と近い関係にあるのは、和歌では雲紙本・関戸本、漢詩では久松切・粘葉本・伊予切が挙げられる。

伝行成筆大字切がそれらの伝本と同文であり、かつ、その本文と他本との間に異同がある事例を以下、挙げる。その際、まず伝行成筆大字切の本文を載せ、当該箇所傍線を付し、次にその異同を載せ、その本文を有する諸伝本の略号を括弧内に示す。

① 386 □□□らのつきのひかりしさむければかけみしみつそまつこほりける (行大)

〈同〉 つきのひかりし (雲・関・山・戊・葦)

〈異〉 つきのひかりの (粘・伊・久)

月乃光之 (巻)

② 396 かそふればわか身にとまるとしつきをおくりむかふとなにいそくらむ (行大)

〈同〉 わかみにとまる (雲・関)

葦手本	戊辰切	山城切	卷子本	久松切	伊予切	法輪寺切	近衛本	粘葉本	関戸本	雲紙本	行大	歌 詩	
17	17	15	15	17	17			17	17	17		行大	
10	10	4	9	9	9			9	12	12			
58.8	58.8	26.7	60	52.9	52.9			52.9	70.6	70.6		%	
283	279	278	282	277	283	36	103	281	284		36	雲紙本	
201	184	192	212	208	191	26	67	184	265		21		
71.0	65.9	69.1	75.2	75.1	67.5	72.2	65.0	65.5	93.3		58.3	%	
283	279	278	282	277	283	36	103	281		759	40	関戸本	
202	182	197	211	205	189	28	65	182		705	26		
71.4	65.2	71.0	74.8	74.0	66.8	77.8	63.1	64.8		92.9	65	%	
280	276	277	279	276	283	34	103		827	763	41	粘葉本	
184	179	148	183	220	266	33	94		585	559	29		
65.7	64.9	53.4	65.6	79.7	94.0	97.1	91.3		70.7	73.3	70.7	%	
102	103	101	103	105	105	32		459	450	414	18	近衛本	
69	72	60	60	86	94	31		432	315	313	12		
67.6	69.9	59.4	58.3	81.9	89.5	96.9		94.1	70.0	75.6	66.7	%	
36	36	35	36	36	36			131	152	149	146	5	法輪寺切
27	24	21	24	29	33			121	146	109	112	4	
75.0	66.7	60.0	66.7	80.6	91.7			92.4	96.1	73.2	76.7	80	%
282	278	279	281	278		152	459	842	827	763	41	伊予切	
192	183	155	194	227		149	428	809	583	559	29		
68.1	65.8	55.6	69.0	81.7		98.0	93.2	96.1	70.5	73.3	70.7	%	
276	272	273	275		835	151	459	835	822	754	41	久松切	
208	193	175	201		686	125	379	699	585	556	30		
75.4	71.0	64.1	73.1		82.2	82.8	82.6	83.7	71.2	73.7	73.2	%	
281	277	276		825	830	147	452	830	817	751	41	卷子本	
200	187	170		526	530	86	285	532	455	430	23		
71.2	67.5	61.6		63.8	63.9	58.5	63.1	64.1	55.7	57.3	56.1	%	
277	273		809	814	819	151	444	819	806	738	38	山城切	
168	156		508	657	653	121	344	656	603	565	25		
60.6	57.1		62.8	80.7	79.7	80.1	77.5	80.1	74.8	76.6	65.8	%	
278		813	824	829	834	149	458	834	823	755	41	戊辰切	
205		669	561	696	714	122	388	716	609	583	28		
73.7		82.3	68.1	84.0	85.6	81.9	84.7	85.9	74.0	77.2	68.3	%	
	813	796	807	812	817	145	439	817	807	740	38	葦手本	
	682	598	515	625	631	121	350	633	561	534	21		
	83.9	75.1	63.8	77.0	77.2	83.4	79.7	77.5	69.5	72.2	55.3	%	

【諸伝本間の本文異同調査表】

我身に留る(卷)

〔異〕わかみにつもる(粘・伊・久・山・多・戊・葦)

③ おほてらのいりあひのかねのおとことにけふもくれぬときくそかなしき〔行大〕

〔同〕おほてらの(雲・関・卷・戊・葦)

〔異〕やまてらの(粘・近・伊・久)

おほ
やまてらの(山)

④ 318 尋陽江色湖添滿彭蠡秋声雁引来〔行大〕

〔同〕湖(久・関・卷・唐2・山)

〔異〕潮(雲・粘・伊・下・散・戊・葦)

⑤ 475 王朗八葉之孫撫徐詹事之旧草〔行大〕

〔同〕事(久・雲・関・卷・山・戊・葦)

〔異〕子(粘・近・伊・太)

⑥ 608 観空浄侶心懸月送老高僧首剃霜〔行大〕

〔同〕浄(久・粘・近・伊・卷・山・太・戊・葦)

〔異〕僧(雲・関)

右のうちの①・②・③は伝行成筆大字切と雲紙本・関戸本との同文例である。うち、②・③は伝行成筆大字切・雲紙本・関戸本の誤写であると思われる。④は伝行成筆大字切と久松切、⑤は伝行成筆大字切と久松切・雲紙本・関戸本、⑥は伝行成筆大字切と久松切・粘葉本・伊予切等との同文例である。うち、⑤は粘葉本・伊予切等の誤写であり、⑥は雲紙本・関戸本の誤写である。

ここから、伝行成筆大字切と久松切・雲紙本・関戸本との関係がそれぞれ近いことが推測される。しかしながら、雲紙本・関戸本と同文箇所を有している①・②・③では伝行成筆大字切と久松切との間の異同が確認される。ただし、久松切と伝行成筆大字切とは注記において一致する箇所がある。事例を挙げると以下の通りである。

⑦ 323 賓鴻是故人 後中書王(行大)

(同) 賓鴻是故人 後中書王(久)

(異) 秋雁似故人 後中書王(雲・関・山・多)

後中書王(粘・伊・戊・葦)

⑧ 389 雪尽水亦积 相規(行大)

(同) 雪尽水亦积 相規(久)

(異) 相如(雲)

雪中水亦积 相如(関)

相規(粘・伊・大内・下・戊・葦)

一方、伝行成筆大字切と十二世紀書写とされる諸伝本との同文例も確認される。伝行成筆大字切がそれらの伝本と同文であり、かつ、その本文と他本との間に異同がある事例を以下、挙げる。

(1) 305 しらつゆもしくれもいたくもるやまはしたはのこらすもみちしにけり(行大)

(同) もみちしにけり(下・戊)

(異) いろつきにけり(雲・関・粘・伊・久・唐2・山・卷・戊・葦)

(2) 385 霜嫌鶴唳寒無露水結狐疑薄有水(行大)

(同) 嫌(山)

〔異〕妨（雲・関・粘・伊・久・多・卷・戊・葦）

(3) 47贈爵新恩^①文^②剋石獲^③ 麟後集世知丘〔行大〕

①〔同〕文（山・葦）

〔異〕銘（雲・関・粘・近・伊・久・太・卷・戊）

②〔同〕剋（山）

〔異〕刻（雲・関・粘・近・伊・久・太・卷・戊・葦）

③〔同〕麟（山）

〔異〕麟（雲・関・粘・近・伊・久・太・卷・戊・葦）

堀部正三氏は右記(2)・(3)の当該箇所（四か所）を取り上げられ、次の通り、極めて重要な指摘をされた。

辛うじて僅か数葉の断簡を遺存したにすぎない大字朗詠集切にのみ見られる所であるが、この事実はこの際特に重要な意味を有つものと考へられる。即ち、以上の如き山城切特有と考へられる箇所も、現存他諸本に見えないからといふ如き理由のみから、これを後世的な変訛誤謬であると断じてしまうことが極めて危険である事を感じるのである。とまれ大字朗詠集切と山城切との間に見る奇しき符号より考へてみても、今我々が山城切特有と考へる本文も実は更に古い時代のある系統本の特徴を受け継いだものが多く存するのであるのかも知れない。⁽⁸⁾

右の事例のうちの(1)「もみちしにけり」についても同様なことがいえるのではなからうか。「もみちしにけり」は、後代、『和漢朗詠集』諸伝本において普及した本文であり、それによると後世的なものかと思われるのだが、伝行成筆大字切が当該本文を有していることから、堀部氏が述べられた通り、実は古い時代からの本文であることが知られるのである。

なお、調査し得た諸伝本における伝行成筆大字切の独自本文について、和歌は四か所、漢詩は七か所が確認された。

以上、伝行成筆大字切と諸伝本との関係について、個々の本文を検討した結果、伝行成筆大字切と、久松切・雲紙本・関

戸本との関係がそれぞれ近いことが窺われた。しかし、伝行成筆大字切と粘葉本・伊予切との同文例も確認された。また、伝行成筆大字切と久松切とは注記においても同一の事例を共有していた。

しかしながら、伝行成筆大字切と久松切との間には異同も存するものであった。

一方、伝行成筆大字切と下絵切・山城切・戊辰切・葦手本との同文箇所もそれぞれ確認された。

四

伝行成筆大字切は、雲紙本・粘葉本両類の本文を有しており、雲紙本類とは誤写と思しき本文を共有していることが確認された。

一方、伝行成筆大字切が321（雲紙本・関戸本に無）、322（粘葉本・伊予切に無）を有し、かつ、個々の本文、及び注記において雲紙本・粘葉本両類とは異なるものを有していることも明らかとなった。その中には伝行成筆大字切と、久松切・下絵切・山城切・戊辰切・葦手本との同文箇所もいくつか確認された。とりわけ、伝行成筆大字切は、久松切と近い関係にあると考えられる。久松切を含む十二世紀の書写とされる諸伝本も321・322を有し、その注記の内容についても伝行成筆大字切と共通していた。

かつて久曾神昇氏は、諸伝本の関係、及びその生成過程について①（恐らく撰者公任により）三種が意図的につくられた、②雲紙本・関戸本 ↓ 伝行成筆大字切・久松切・卷子本・葦手本 ↓ 粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺切という順序により一元的成長を遂げた、③その三種は「次第に追補せられた結果」のものであり、「初稿本」・「再稿本」・「精撰本」と位置付けられると述べられた。⁹⁾ そのうちの「再稿本」とは具体的にはどのようなものを指すのか、その定義不明ながら、本考察結果によると、「初稿本」から「精撰本」へと成長を遂げたその間に伝行成筆大字切が位置するという捉え方ではなく、「初稿本」の前の段階の「原形」に以上述べた伝行成筆大字切の要素が既に含まれていたと解する方が整合的ではなからうか。

伝行成筆大字切の書写年代が十二世紀中葉ということが事実であるならば、その頃、既に、雲紙本・粘葉本兩類の混在が見られ、なおかつ、その兩類には無い要素を有する伝本が存していたということになる。

伝行成筆大字切はあまりにも分量が少なく、想像の域を出ていないが、本書（第三章）中、事例を挙げた通り、伝行成筆大字切も含め、十二世紀の書写とされる諸伝本における雲紙本・粘葉本兩類混淆の様相は無秩序であり、それらを一括して「再稿本」と捉えることは出来ないのではなからうか。

本書（第三章）中、指摘した通り、時代が下り、雲紙本・粘葉本兩類の混淆、注記の詳細化が進む傾向が看取される伝本も実際にはある。しかし、その全てが後代的特徴であるとはいえない。前項「三」に引用した堀部正二氏の御指摘の通り、諸伝本中、十二世紀書写本にしか見られない要素について、それらを「後世的な変訛誤謬」であると断じ得ない。その遡源を求めると伝行成筆大字切の散逸部分に既にそれらが存していた可能性もあり得ることが本考察結果から推測されるのである。

注

- (1) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一三卷〔平成2年 講談社〕P 385
- (2) 堀部正二氏編著『校異和漢朗詠集』〔昭和56年 大学堂書店〕P 36
- (3) 前掲〔注1〕に同。
- (4) 久曾神昇氏「和漢朗詠集の本文批評・「大字和漢朗詠集の内容」〔『仮名古筆の内容的研究』〔昭和55年 ひたく書房〕所収〕
- (5) 久曾神昇氏「和漢朗詠集の本文批評〔『仮名古筆の内容的研究』〔昭和55年 ひたく書房〕所収〕
- (6) 久松切、「鴻」字、不明瞭。或いは「雁」か。
- (7) 雲紙本には別筆にて「天浄識資鴻」と書されている。

- (8) 前掲(注2)に同。P 332・333
- (9) 本書(第二章第六節)中、既述した。